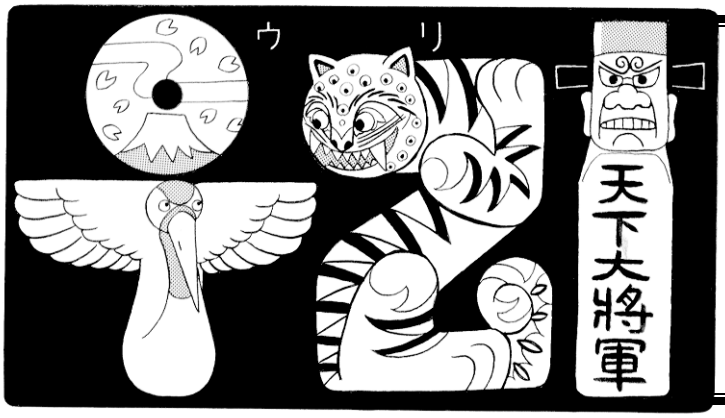

日韓合同授業研究会会報

第７８号

2011年11月12日発行

沖縄大会から二年、あらたな活動報告

――一刻も許さない聞き取り作業とその未来－

日韓合同授業沖縄調査委員会代表　善元

はじめに

１５回沖縄大会は、2009年「加害と被害の和解はどこまで可能か」として行い、沖縄での朝鮮人軍夫・慰安婦のことを明らかにし、私たちの会の原点を提案してきた。15回大会を継起として、沖縄での朝鮮人軍夫・慰安婦の調査委員会を昨年立ち上げた。今年で２年目になり多くの成果をあげてきた。ここでは紙面の関係上今年の活動を中心に報告をしてみたい。まずはこの委員会の性格は次のようである。

組織・目的

・軍夫・慰安婦など沖縄での犠牲者の実態を明らかにする

・被害、加害の視点により未来志向で沖縄戦の事実を明らにする

・日本（東京・沖縄）・韓国の３地域におく

沖縄の聞き取り　－とにかく急がなければ！－

昨年の６月、宮古・石垣を含み沖縄で６名の聞き取り調査を行い、済州島大会に報告をすることができた。聞き取りと同時にシンポジュウムと「平和の集い」も行った。内容は「朝鮮人軍夫の沖縄日記」（金元栄）の朗読と謝名元慶福監督の映画「軍隊がいた島」の上映であった。

沖縄にある「平和の礎」にはいまだ朝鮮人軍夫の犠牲者は447名しか明らかになっていない。しかし韓国側が作った慰霊碑では犠牲者１万名である。私たちはこの落差を埋めるために、犠牲者の一人一人を明らかにし「もう一つの沖縄戦」として新たな視点で調査活動をはじめた。

済州島大会では本部町の座覇さんの話をした。当時５年生であった座覇さんは、日本軍が朝鮮人軍夫を酷使し生活も無残であることを鮮明に記憶していた。食事の時、食器さえ渡されなかった。座覇さんは友達とその朝鮮人軍夫に食器代わりに桑の葉をきれいに洗いあげて

いた。座覇さんは軍夫の「おじょうちゃん、ありがとう。おじょうちゃん、ありがとう。」という言葉が忘れられないという。

今年も聞き取りを続けた。これは緊急の課題である。実は昨年聞き取りの約束をして今年できなかった人が 2 人いる。一人は高齢で聞き取りができず、もう一人の方は亡くなっていた。待ったなしの聞き取りである。今年の７月、石川さんの聞き取りをした。石川さんの話は座覇さんとは全く異なっていた。座覇さんは米軍の上陸の沖縄の西海岸であったが、新たな聞き取りをした石川さんは東海岸に住んでいた。石川さんは朝鮮人が強制労働されていたのを見た。しかし当時石川さんは沖縄の人とりわけ石川さんの母は朝鮮人にとても優しく接していたという。母は「苦しいときはみな同じだ」とよく言っていたそうである。同じ沖縄でも大きな違いが見られる。聞き取りのためにいい話、つらい話、ほんのちょっとした話でも可能な限り記録していきたい。

韓国での働きかけ

夏ソウルに行った。戦後 67 年たった現在、いまだに沖縄では犠牲になった 9500 名の朝鮮人軍夫の全体像がなかなか確認できない。そこでソウルに行った。韓国には日本政府が作成した資料がある。このことには説明がいる。1990年の慮泰愚韓国大統領来日に際して韓国被害者団体の強い要望により、日本政府作成の名簿が韓国政府に手渡された。1993 年のことである。2004年、韓国では「日帝強占下　強制動員被害真相究明委員会」を発足、この資料の情報公開を始めた。私たちが調査したいことは沖縄朝鮮人犠牲者である。知りたいことは2つある。

①沖縄に動員・連行され生存した人

②沖縄に動員・連行され亡くなった人

明らかにしたい唯一の資料は「身上調査票」である。「身上調査票」とは日本政府が作成した幻の軍人・軍属の個人補償名簿のことである。韓国・朝鮮人の遺族に対する（氏名・本籍・留守家族・死亡状況・給与などの記載で遺族扶助料等の算出が記入）調査書である。これが幻と言われているのは、日本政府は戦後、韓国・朝鮮人の遺族に対して遺族扶助料の支払いの基礎資料を作成していた。その後戦後補償が１９６５年の日韓条約締結のため国家賠償になったため、現在は日本では見ることができない。いわゆる「請求権協定」で解決済み」の論理があるからである。その日本が作成した資料が日本では閲覧できず、日本では公開されておらず、日本側研究者も韓国の「日帝強占下　強制動員被害真相究明委員会」を訪ねて、そこで情報を得るしかない、ということは皮肉なことである。

昨年私は人の紹介で「日帝強占下　強制動員被害真相究明委員会」を訪れた。そこで原資料の一部が入手できたことは大きな成果であった。今年11月6日私は人を介して韓国に行き「日帝強占下　強制動員被害真相究明委員会」で資料収集の予定である。ホンジョンピル教授（明智大学　1995年前後からの発掘作業で犠牲者 13000名うち 3000 名確認）とも会う予定である。

ふたたび沖縄でのしごと

「若い世代の沖縄戦」語り部　風化していく沖縄戦を語り継ぐための会

戦後６７年たった現在、今沖縄戦の継承が大きな試練に立たされている。沖縄では平和の大切さを子どもたちに伝えてきたが、焦土と化した沖縄には、平和教育を実施するとき、戦争の資料が消失し生き残った証言者の話を元に授業を組み立ててきた。今、沖縄の平和学習を推進する上で２つの大きな課題がある。

１沖縄戦を継承する語り部の証言を聞く機会が少なくなっていること

２沖縄の平和を語る時、国際的な視点からの沖縄戦の再構成が必要であること

日本軍が沖縄住民を犠牲に繰り広げられたことは、現在もなお平和教育を考えるうえで重要であり、私たちの研究会とは深く結ばれている。おじい、おばあから戦争体験を聞いてきたが、私たちは風化していく沖縄戦を若い人たちを中心にした「沖縄民衆の語り部」として語り継ごうと考えている。そして「加害と被害の和解はどこまで可能か」を検証していきたい。

私は沖縄にきて次のようなことを考えた。戦争はなりよりも人間を壊していく。人としての感情、人間の尊厳さえ壊していく。「語り継ぐ」と言うことは証言者の目には見えない思い、無形の財産を伝えることである。まずはそのことを知ることからはじめ、常にその原点に立ち返りつつ、語り部として戦争を、平和の大切を伝えていきたい。

むすび・沖縄に未来館を！

戦後６０年たった現在、いまだ明らかにされていない沖縄の９５００名の韓国・朝鮮人の犠牲者を明らかにすることは日韓合同授業研究会から始まった。私たちはまず沖縄戦の事実を明らかにしてこそ真の和解の始まりだと考えたからである。そしてその成果を伝えていく、このことを考えて未来を担う若い世代、およびアジアの人たちが集い平和志向で未来を考え行動できる「未来との対話館」構想を考えてみた。「メモリアル館」では５０年先を考え、ここに犠牲者の遺族や関係者がここを訪れた時、この地でどのような日本人と出会いどのように生きたのかさまざまな出会いの事実を知ることができる場にしたい。また日本人がここを訪れたときにはどのようなアジアとどのような関係を持つかがわかる大切な場にしたい。そんなことがここ沖縄の地でできるか、がんばって見たい。

２０１１年　第17回交流会旌善大会を終えて

アリラン峠を越えて　　遠藤

アリーラン　アリーラン　アーラーリーイイヨ
アリラーンコーゲーロー　ノーモガアーンダ

江原道チョンソンのアリラン学校でともに歌った「チョンソンアリラン」は、忘れることができない歌だ。また、交流会で参加者を魅了させた嵯峨山さんの「珍島アリラン」等も忘れることができない。

アリランといえば、いま日本の音楽教科書にも載っている「アリラン」が有名である。しかし、韓国

各地、いや韓国人が住むところには、その地のアリランが存在する。民族学校でもアリランは歌いつがれている。チンヨンソン先生の講演をとおして、アリランが東アジアをつないでいることを知ることができた。

「アリラン」とは歌だけではない。韓国や韓国人どころか、われわれ日本人にとっても「アリラン」は存在する。求めてやまないもの、求めてもなかなか手元にひきよせることができないもの、望みもしないのにふりかかる苦難等々、これらこそが「アリラン」だ。「アリラン」の意味とは一体何なのか。わかっていないのも魅力である。それこそ、「アリラン」なのだろう。

韓国語に「行くほど泰山だ」ということばがある。泰山に行きつくまでに一体「アリラン峠はいくつ存在するのか。

「少女時代」の歌やドラマ、そして大久保の街のにぎわいにみられるように韓流ブームはいまさかんである。

この現象とは反対に、韓国ドラマ放映反対フジテレビデモ、大久保での反韓流デモ、横浜市教委、藤沢市教委、神奈川県立平塚中等教育学校等での「つくる会」教科書採択、「在特会」や二チャンネルのあまりにも異様な動き等、「反韓流」、「外国人排斥」の声もかまびすしい。先日も右翼の街宣車が四谷の韓国文化院ビルに、何回もけたたましい音声、騒音で攻撃しているところに出くわした。

「反韓流」はいうまでもなく、よりによって 19 世紀以来の国際都市横浜や、アースフェスタをはじめ、神奈川に住む外国の人々とのつながりを推進してきた神奈川の地で「つくる会」教科書が採択されてしまったことはとても恥ずかしい。

日韓の教育のあり方を考えてきたわたしたちには、泰山を前に越えなければならない「アリラン峠」が重畳として存在している。両国の教師たちの授業交流、研究をとおしてこそ、真に日韓がつながり、「アリラン峠」を乗り越えることができる。乗り越えつつ、アイドルやドラマだけにとどまらない韓流、そして東アジアの大きなうねりをつくりあげたい。

2011 年第 17 回日韓合同授業研究会　in チョンソン　に参加して

高島

１７年続けてきた交流会であることにその歴史の重みを感じ、日韓の皆さんの「パワーとエネルギー」を感じた続けた学習会でした。

実は、昨年までの同僚の佐藤さんに強く？誘われての参加でした。以前から、韓国・北朝鮮には興味関心があり、町田市民大学の韓国・北朝鮮の勉強会にも参加もしました。町田国際交流センターで知り合った、気の合う仲良しの韓国人の友人もいます。また、ご多分に漏れず、「韓国ドラマファン」でもありますが、韓国の現役の先生方との交流は初めてでした。

チョンソン交流会に参加して、感じたこと考えたことを、思うままに書いてみたいと思います。

○１７年毎年欠かさず続けてきた交流会であることに感激しました。継続していくこと、特に信頼がおける日韓の仲間がいることに大きな意義があり、大きな財産だと思います。計画準備には大きな労力が必要ですが、是非今後も

継続していただきたいと思います。
　私は、20 年近く国際教育に携わっていますが、特化した国や地域がないことがさみしくもあり、また皆さんを尊敬し、羨ましく思いました（青年協力隊で参加したトンガとは、日本に留学した教え子や在日トンガ人との交流がありますが、ある留学生が起こした事件で、すっかり熱が薄れてしまっていました・・・それと、あれこれと気が多いのかな？）。
○日本の皆さんは韓国語を、韓国の皆さんは日本語を勉強されている方が多いことに感動しました。松本先生や阪堂先生をはじめ超一流の日韓通訳者の先生方が参加されていることも感激でした。よりよく知ること、理解することの第一歩は語学ですね。韓国語をかじっただけの私は、「もっと話がしたい！」と自分自身を情けなく思ってしまいました。
○皆さんが、明るくそして志高く、大きな夢や希望をもっていることに、パワーをいただきました。講演者のチョンソンアリラン研究所の所長さん、舎北労働抗争のイウォンガプさん、原爆被害者問題のカンジェスクさん。何れの方も長年の間、地道に活動に携われ、志に向かい、どんなことにも正面から向き合っている姿は心洗われました。日韓の参加者の方も皆明るく、前向きに活動されていて、自分自身を自省させられました。
　忙殺された毎日の中で、ついつい愚痴が多くなり、その中で日本国内、自分の学校いや自分の学年、クラス、部活動にのみ焦点が絞られていくことに危機感を感じています。広い視野を持つこと、様々な価値観や経験を共有することがいかに大事か、多くの先生方にも参加してほしいと痛感しています。
○韓国は、若い参加者がたくさんいて、その若い方もこの活動の主になり、活躍するパワーのある参加者がたくさんいらっしゃいました。しかし、日本はなぜ若い方の参加が少ないのでしょうか？

　私は、全国国際教育研究協議会の事務局をやっています。やはり、若い先生方を引き込むのには、大変苦労します。あの手この手で、時には甘い汁？を飲んでいただき、常に楽しく？仕事量も嫌われない程度にと・・・配慮しています（そんなことをしたくないのですが・・しても意味のないことかもしれません）。それでも、学校と関係のない？少ない？研究会の仕事は、なかなか長続きしません。「日本社会の構造がおかしい！」と痛感します。なぜ、自分から、問題意識を持とうとする人が少ないのでしょうか？なぜこんなにも「関わりたくない症候群」が蔓延しているのでしょうか？また、私自身も、若手の育成に携わる年齢ですが、自分にゆとりがないので、つい面倒で自分でやってしまう、仲間を勧誘するところまで手が回らないのが反省です。
○「震災・津波・原発事故の授業報告」では日韓のずれも感じました。これは、仕方がないことで、これらの情報は、ほとんどテレビ、新聞、雑誌などのマスコミからのものです。日本国内の情報も同じですが、私たちは、情報をどう取捨選択するか？マスコミのバイアスは何か？考える力が必要と感じました。人と人との交流がそれを埋めていく大きな手段になるのではないでしょうか？今回は、日本開催が東日本大震災の影響で、急遽、韓国開催に決まったとのこと。この交流会を開催するにあたり、準備された実行委員の方々に心より感謝申し上げます。また、こんなにも急な変更も、何の問題もなく進めることができたのは、17 回という歴史、積み重ねがあったからだと思います。長年携わ

ってこられた方々にも感謝申し上げます。今後もこの交流会が、重ねられていくことを切に願っています。ありがとうございました。
＊今回の交流会で学んだことを、どう実際の授業や教育活動に生かしていくかは、まだ、まとまっていません。本当にすみません。
　本当はそれが大事なのでは？と思っていますが…

朝鮮民主主義人民共和国を旅して

再びの朝鮮民主主義人民共和国　　雁部

はじめに

　昨年に続いての二度目の朝鮮民主主義人民共和国（以後「共和国」と表記）訪問は、何か懐かしい場所に行く感じがする。

　日朝友好連帯埼玉県民会議の呼びかけで、団長の日森文尋さん、朝鮮総連埼玉県本部の黄鎮成さん、事務局の嶋田和彦さんに全て頼っての楽しい訪朝となった。今年は１４人で賑やかだ。

　昨年は中国でのビザ申請の時、共和国の大使館が休みで、どうなることかと心配したのだったが、今回はスムーズに進む。それどころか、「バイクの松尾」さんが、ヨーロッパやアメリカから来る人毎に話し掛け（？）友達になっていく様子は圧巻だった。大げさなパフォーマンスに職員の方も気にしながら黙認していた。

　ピョンヤンの空港に降り、建物に入ると昨年と違う。「えっ、一年もかけずに建てたの？」と驚いていると、昨年も案内をしてくださった李成虎（リ・ソンホ）さんが、昨年は建設中だったと説明してくださった。なるほど、帰国時に二階でコーヒーを飲んだ空港の建物はすぐ横にあった。指導員の金成泰（キムソンテ）さん、今回は通訳の全てを彼が担当した。もの凄い勢いで学習をしている、と感じた。

　長年、朝鮮学校との合同授業に取り組んできて、朝鮮学校の教師や子どもたち、総連の方々の共和国への熱い想いは受けとめていた。今年はさらに、この一週間前まで、韓国の旌善で開かれていた「日韓合同授業研究会」で、韓国の教師の何人かと共和国訪問について話していた。イインシク先生は共和国を訪問したことがあり、ピョンヤンの中学校で教えたい願いをもっている。チンヨンソン先生は、「アリラン」研究に開城に行ったことがあるそうだ。共和国の研究者と話したいと言っておられた。日本・朝鮮学校・共和国・韓国の子ども・教師たちが共に集い、未来を語り合えたら、どんなにか素敵だろう。

ピョンヤンの人民大学講堂、地下鉄

　共和国の社会主義は、「平等」が考え方の軸になっているということだ。誰もが学べる機会を持つ。人民大学講堂では、多くの人々の学ぶ姿があった。「総インテリ」を目指すのだそうだ。誰でも申請すれば無料で学べるとのこと。かつては「日本語」に人気があったそうだが、両国の関係の悪化に伴い受講者が少なくなっているという。

　地下鉄に乗る機会を得た。地下深く建設されているのは、韓国と同じだ。核シェルターの役割も果たすのだろう。エスカレーターが長いので、腰掛けて上り下りするお年寄りもいる。昨年に比べ、服装がさらにカラフルになったと感じた。生活向上のため軽工業に力を入れているというのがわかる。計画生産で、一つ一つの生活用品が飛躍的に増えているのだ。どこ

の国でも同じだと思うのは、子どもにかわいい服を着せてお出かけしていることだ。小さなフリルのようなスカートがついたパンツは日本でも流行っている。地下鉄のホームにはシャンデリアがあり豪華だ。運賃を聞いてみたら、同一料金で、キャンデー１つの値段にもならないという。さまざまな人々が乗り合わせていて、メンバーたちは日本から帰ってきたという中年の婦人と話がはずんでいた。

平壌第一中学校

どこか教育施設を見学したいという望みがかなえられた。ピョンヤンのエリート中・高等学校への訪問ができた。夏休み中であり学生はほとんどいなかったが、趣味で楽器演奏をしているというグループの子どもたちが、私たちのために演奏してくれた。「よくいらっしゃいました」という歌と演奏。この曲は韓国でも聞いたことがあった。フルートやアコーディオン、ピアノ、バイオリンなどさまざまな楽器で美しい演奏を聴かせてくれた。エリート教育でクラブはない中でも、子どもたちは自分の好きな事に夢中になっている、何処も同じだ。

学校は、先進的な設備が整い、教育にかけている国の姿勢が伺われた。廊下に成績の順番が張り出されていた。競争が重視されているようだ。日本では、５０年ほど前、私が通っていた高校でも玄関に成績が張り出されていた。私はとてもいやだったが、このエリート校の子どもたちは、どう思っているのだろうか。日本も競争を煽る雰囲気は最近とても強まっているが。

大同江果樹総合農場

昨年は秋に訪れた。丘の上から見渡す限りの果樹園だ。一面のリンゴの木に赤い実が見える。牛や豚の排泄物から肥料を作り、有機農法で進めると聞いていた。着実に計画が進んでいるのを目にして嬉しかった。リンゴの木の間隔が狭すぎるのではないかという指摘もあったが、メンバーの一人が、「沢山収穫するのが大切なのですね。」と言っていたのも印象的だった。まず、多くの人にリンゴを供給すること、お年寄りにリンゴの缶詰を、子どもたちにドライフルーツを食べさせたいという若い女性の説明は、確信に満ちていた。来年は、どれほど多くの実をつけるだろうか。社会科学院の経済研究士が、共和国の経済状況を説明してくださった。適地適産、種子の改良が行われ、食糧事情もよくなってきているという。食べていけるだけではなく、豊かな衣食住を実現したいと言う説明は熱のこもったものだった。

江西三墓

ここを訪れることが出来るとは！対外連絡協会の配慮で、高句麗末期有名な壁画古墳を見ることができた。清龍、白虎、玄武、朱雀が色あざやかに描かれていた。

６世紀末から７世紀はじめに造られたこれらの古墳壁画は高句麗壁画の集大成と言われているそうだ。高松塚古墳やキトラ古墳に関わりのある壁画を実際に目にした感激は大きい。これを機会に高句麗と日本の歴史の交流を学びたいと思った。また、もし機会があれば、高句麗の「三本足のカラス」の絵を是非見たい。韓流ドラマ「朱蒙」は、高句麗建国の王「東明王」の話であるが、高句麗の旗には「三本足のカラス」が描かれていた。太陽を象徴するという。神武天皇を案内した「ヤタガラス」も３本足というから、興味は尽きない。

日朝国交正常化を

ニュースでフランスがピョンヤンに事務所を設置したと伝えている。残されたのは日本と

アメリカか。日本は戦後６６年を経ても、未だ共和国に損害賠償もしていない。南北分断は、もともとは日本が朝鮮を植民地にしたことに始まる。共和国に一日でも早く賠償をしなければ、強制連行された人々、慰安婦とされた人々、被爆した人々の恨みは消えない。

2002 年「日朝ピョンヤン宣言」を早く実行し、経済制裁を直ちにやめるべきだ。マンボンギョン号の停止は、朝鮮学校の生徒たちの祖国への修学旅行に重い負担をかけているばかりか、日本に住む朝鮮人と本国の人々とを切り離している。

ささやかだが、自分が出来ることからはじめたい。共和国を知り、共和国に住む一人一人とつながりを持っていけたらと思う。

朝鮮民主主義人民共和国を訪れて　　酒井

昨年訪朝された雁部さんからお誘いいただいて、８月２２日から２７日まで北京経由で朝鮮民主主義共和国を訪れる機会を得ました。第１７回の交流会から帰って２週間後の出発という慌ただしさの中でしたが、個人で思いついて行ける国ではないと思うのでお誘いいただき機会を得られたことを本当に感謝しています。

大変失礼なことですが、私の訪朝前の共和国の印象は食糧が足りず支配者に国民が苦しめられている国というものでした。いったい食べ物は足りているのか、人々の生活に選択の自由はあるのか、というのが大きな疑問でした。資本主義にどっぷりつかっていて今の日本の現状を困ったものだと思っていても社会のシステムにまでは考えが至らない者なので共和国の状況というのは私の理解力を超えたものでもありました。ビザの取得のために立ち寄った中国が生まれて初めての社会主義国でそうした国々がどのように機能しているのか、その中での人々の思いなどはとても想像できずにわからないことだらけでした。

今回の旅では板門店はもちろんのこと金日成主席の遺骸の安置されている廟、誰でも希望者が学んだり利用することができる学習施設の人民学習堂、四神の描かれた壁画のある古墳の見学、金正日総書記のために建てられた中学校、最新設備の整った大学、たくさんの外国人観光客が訪れ、人々の楽しみでもあるアリラン祭、郊外にひろがる大規模りんご農場など本当に多くのものを見せていただきました。

板門店に向かうために平壌市内をほんの少し出ただけでも所狭しと日本よりずっと狭い間隔で稲やトウモロコシが植えられていました。こんな川べりまで！こんなに詰めて！とびっくりしたのは少し前に訪れた江原道チョンソン（旌善）でも同様だったので日本人との国民性というか農作の仕方の違いがあるのかもしれません。青々とした稲とトウモロコシを見る限り（もっと北の地方はわかりませんが）主食は足りていて勝手に想像していた飢餓の国というのは誤解だったと思えました。でも日本の農地のようにキュウリがあったりナスがあったり枝豆があったりという畑にはたまたまなのか行き当たりませんでした。案内員の方も土地がやせているとおっしゃっていましたが素人の私にも岩の上のうすい赤土では多様で豊かな収穫はむずかしいと思われました。自然に恵まれた日本の豊かさを思うと同時にこのようなやせた地からもかつて根こそぎ奪おうとしていたのだ、と豊かであることを当たり前に思うことの傲慢さをあらためて情けなく

思いました。

共和国では職業をどのように決めるのか、というのも疑問の一つでした。金正日総書記が学んだという平壌第一中学校では寮生活でありながら試験の結果によっては転校も余儀なくされるような超エリート校だという話や案内員の方が希望していた英語ではなく日本語を専攻された話などを聞くとやはり能力主義なのはどこの国も変わらないと感じました。でも人民大学習堂はだれでも学べ、職業についてからも希望すれば学ぶ機会は与えられるとのことですし、一人一人の意志がしっかりしていれば就職で人生が半ば決まってしまうような日本より選択の幅が広いように思います。一人一人の意志をはっきり自覚してよりよきものをなそう、というのが主体思想なのかな、と共和国の方々の言葉から想像します。

りんご農場で多品種の栽培に取り組んでいるという説明の中で人にはそれぞれ好みがあるのだから、赤いリンゴ青いリンゴ、酸っぱいのや甘いのや多様な好みにあうものを生産できるようにと総書記が言われたので・・・という話がありました。資本主義社会では一番土壌に合った生産性の高いものや市場で売りやすいもの、売れるものを栽培するでしょうに、多様性を認めるという言葉が思いがけずりんご農場の説明をしてくれるりんごのように赤いほっぺのかわいい女性から聞かされて私はちょっと驚きました。為政者がこれがよいものである、と示すのが社会主義の現状であるような気がしていたからです。

私の共和国のイメージは日本のマスコミでも時折紹介される朝鮮中央通信のアナウンサーの強い口調だったように思います。達成しえた成果をとにかく声を張り上げて指し示し、相対するものには強く反駁する姿勢の向こうに隠されているさまざまな事情とか人々の生活は訪朝前の私の想像力の範囲をはるかに超えていました。でも今回の訪朝で目にした人々の生活は私の見知っているものとは違うところはなかったし、人々の気持ちの動きも同じでした。アリラン祭の観客の高揚感、同行した年配者に地下鉄で席を譲ってくださった方のやさしさ、思いがけないプレゼントを貰って心から喜んで笑顔を見せたサービスエリアの販売員のお嬢さん、おばあちゃんと手をつないで階段を「ひとつ、ふたつ、みっつ・・・」と数えながらおりる３歳くらいの女の子、緊張のあまりマイクのスイッチを入れ忘れたままサプライズの歓迎演奏をしてくれた平壌第一中学校の生徒さんたち、時間が足りなくなって経済に関する講義をできなくてちょっとがっかりされていた経済学の先生、バスのパンクを必死で直してくださった運転手の方、夜が更けるのも忘れて遊園地に入るのを心待ちに長い列をつくっている人々・・・。こうした当たり前の表情がありのままに伝わらないのはなぜだろうか、と考えさせられます。

アリラン祭の開催中の訪朝だったので平壌の私たちが訪れるような場所には欧米人や中国人がたくさん来ていました。鎖国時代の日本のように外国人は数えるほどしかいないのかと思っていましたが日本との扉だけが閉ざされているのがよくわかりました。私たちとは別の日本の方にもお会いしましたし、その中のおひとりは韓国の大学院生でもあるとのことだったので、日本が鎖国時代のように内側から共和国に対して扉を閉ざしていると言ってもいいのかもしれません。

帰国してから脱北者の出てくる韓国のドラマを見ましたが脱北した人物の描き方が一部あまりにステレオタイプでびっくりしました。日本での報道だけではなく韓国での報道でも

ありのままは伝えられないのでしょう。一人一人の交流が、大勢の交流がお互いを思いやり尊重する土台になると思いますが交流を阻む壁がはやく取り払われることを強く望みます。訪朝してみて地に足をつけてどういったことができるのかを考えていかなくてはいけないと宿題を貰ってきた気がしています。

神奈川県立高校の状況報告

関東大震災時のことや、日本史の時間に韓国語って、そんなにタブーなの？

いくら語順が近いからといって、日本語の発想どおりに上から訳していけば朝鮮語になるかと思えば、まちがいを犯します。たとえば「どうしようもなくかわいい」「とってもかわいい」というのを「キガ　メッキゲ　エップダ」(息がつまるようにかわいい)と表現したりします。また「立場がない」をそのまま「イプチャン　オプタ」と逐語訳しても何のことかわかりません。「処地が困難だ」「立場が困難だ」と表現しなければなりません。

これは神奈川県渉外部が 1994 年 3 月に発行した報告書『神奈川と朝鮮』の記述の一部である。同県では、このほか 1986 年には、1984 年に行った調査をもとに『神奈川県内在住外国人生活実態調査報告書 - 韓国・朝鮮人、中国人について』という報告書を出している。このように同県は全国の自治体の中にあって「民際外交」を積極的に推進してきた。

上の文では、ハングルの仕組みを解説し、語順が日本語と同じであることを説明するばかりではなく、同じように見えながらも異なることにも注意を払いながら学習することの重要性にまで言及している。

産経新聞 2011 年 8 月 25 日付記事によると、神奈川県の高校教員が 2010 年 12 月、学期末試験終了後、日本史Ｂの授業で「1 コマ 45 分を使って、生徒に自分の名刺をハングルで作らせる授業を行った」ことが問題とされ、県教委は「学習指導要領を発展させた授業を行う場合はあるが、今回は生徒や保護者、県民に疑義を持たれる行為だった」と判断したという。同記事には「木綿についてハングルの発音のモクミョンが日本語と似ていることを教えたところ生徒が関心を示した」ことからハングルを扱うに至った経緯が載っている。この記事が事実通りであるとするならば、なぜこの授業が「疑義を持たれ」るので、行ってはいけないことになるのだろうか。ハングルを知ることは、隣国の文化を知るとてもよい端緒になるのではないだろうか。上の文のように、韓国語が日本語と似てはいても、実は異なるということまでやがて知ることができればすばらしいではないか。韓流が高校生にまで広がっている状況下、たとえ限られた時間であるとはいえ、このような試みを通して韓国語に触れることは「疑義をもたれる」どころか、まさに「発展させた授業」にあたるのではないか。そもそも当該校には韓国語の授業が設置されていないのである。また高校卒業後、大学で韓国語を学習したり、専攻したりする、よい契機になるのではないか。

誤りを教えたのではないのである。学習指導要領や教科書、そしてシラバスを狭く解釈していけばいくほど、生徒の興味関心をひきつける魅力ある授業づくりはできなくなる。つきつめれば、授業における「雑談」、「脱線」も許されないことになる。「反韓流」、「外国人排斥」という一部の潮流下、このような授業が否定されたり、

日本史教科書にも記述されている関東大震災時の朝鮮人虐殺の取り扱いを否定することは、神奈川県が推進してきた「民際外交」を自ら踏みにじることにもなる。なにをかいわんやとしかいいようがない。

本の紹介

「大震災で分かった学校の大問題

～被災地の教室からの提言」

大森直樹著　小学館１０１新書

藤田

大森さんといっしょに仙台の東北朝鮮初中学校を訪れたのは、4 月 29 日のことだった。わずかばかりの研究会からの義捐金を、わざわざ手渡しに行ったのは、とにかく現地を見てみたいという大森さんの誘いがあったからだ。この時のことはウリ 76 号に大森さんが書いている。２度傾いた校舎は、片方が浮き上がり、片方が沈み込んでいた。めちゃくちゃになった職員室と、食堂に書かれた「大地が揺れても笑っていこう！」のスローガン。一輪車で遊んでいた子どもたちの笑顔。地域の人たちと励まし合う焼肉パーティー。そのような中で、大森さんの心に残ったのは、「わたしたちより福島にある朝鮮学校が大変だ。」という尹鐘哲（ユンジョンチョル）校長の言葉だった。大森さんは福島の朝鮮学校が新潟へ避難していると聞き新潟を訪れ、さらに東北の現場を何度も訪れた。ルポライターになりたいと思ったことがあったという大森さんが、被災地を歩きながらこれまで課題としていた教員免許更新制などの教育行政の問題を、深く考え直して書いた本である。

内容は、大森さんらしく「はじめに」の中にすっきりまとめられている。今後の学校について、基本理念をつくり、教育政策を立て直し、早急に具体化することが求められている今日、取り組むべき６つの課題を提示し、その６つの課題に基づいて各章を記述している。

第１章　3 月 11 日の子どもたち

地震と津波による被害の事実を記録すること。地震と津波という自然現象とそれを受け止めてきた社会と人間の側の問題、その両方を見つめること。

第２章　大震災後の先生と子どもたち

自らも被災しながら学校に避難所を開設し、避難者に寝食を提供した教職員と、主体的に手伝う子どもの姿から学ぶ。被災地の非正規教員の存在にも光を当てる。

第３章　原発事故に振り回される子どもたち

3 月 11 日以後、原発事故に大人たちはどう対処したのか。目に見えない放射能汚染は、子どもたちにとって、政府・マスコミ・地方自治体・学校・保護者といった大人たちによってしか、その実態を認識できない問題である。

第４章　これからの学校はどうあるべきか

１から３章で明らかにしてきた事実は、教員が歯を食いしばるようにして「これまでと同

じ学校」を目指している姿だった。しかし、今回の出来事の前に「これまでの学校」は対応できるのかを考えたとき、教員が教育政策に右往左往する存在ではなく、子どもたちと向き合う主体的な存在として自己認識する必要がある。今年の交流会でも報告された善元さんの学芸大学での授業などを紹介しながら、「一人の人間もきりすてない学校づくり」という理念を提示する。

第5章　政府の震災対応と教育政策への提言

現場の教員が自主的に子どもたちと向き合っていくこと。その障害となっていることを撤廃していく提案。1958年の勤務評定以後の教育政策の中で、「教育現場に不要なこと」の一覧と「一人の人間もきりすてない学校づくり」実現に向けての教育条件整備のロードマップ。

第6章　被災地の復興から学校教育の再生へ

被災地の学校を見て、これからの学校づくりに課題を抽出してきたが、教育再生の希望は、学校の中にずっとあったし、今もある。そして、東北の学校の中にこそ「一人の人間もきりすてない学校づくり」に近いところにある。

今年、東京都の小学校は、1 年生から体力テストが行われた。1 年生に腹筋や握力のテストをさせてどうするのかと思っていたら、結果の個人表が配られた。判定グラフ結果についてのコメントなどが書かれている。さらに、それとは別に5段階評価による「認証表」までついてきた。運動会でまっすぐ最後まで走れたことを喜んでいた子はEランクである。さすがにこんな「認証表」は学校の判断で配らないことにした。朝日新聞には、徹底した競争主義を掲げる大阪府の「教育基本条例案」に関連して、乙武洋匡氏までが競争原理賛成を語っている記事が載っていた。このような時代に、東北の被災地や学校の現場を歩き、その中で考えた「一人の人間もきりすてない学校づくり」という大森さんの提言に耳を傾けたい。

短信

◎　毎日新聞の10月18日の新潟地方版に新潟の朝鮮学校で行われた地域との交流行事「ミレフェスティバル」についての記事が載りました。新潟の朝鮮初中学校は、今年5月に福島の朝鮮初中学校の子ども16人を受け入れています。会場には、保護者や地域の住民約1200人が集い、会場では、福島と新潟の子どもたちが一緒に民族舞踊を踊ったそうです。

◎雑誌「世界」に会員の瀬川正仁さんが「教育のチカラ」という題で連載を書いています。今月号は福島県郡山市三春町の教育改革の紹介です。

◎　次回の交流会は、奈良県で行います。「ナラ」（くに）と言う言葉に込められた渡来人たちの想いを想像しながら、準備を進めています。

◎次回のモイムは、11月19日（土）新宿多文化共生プラザです。16：30から談話室で始めます。ぜひお集まりください。(F)

ウリ78号　2011年11月12日
日韓合同授業研究会
事務局連絡先
E-mail　larribee1991@yahoo.co.jp
会費納入先
郵便振替 00170-1-428530